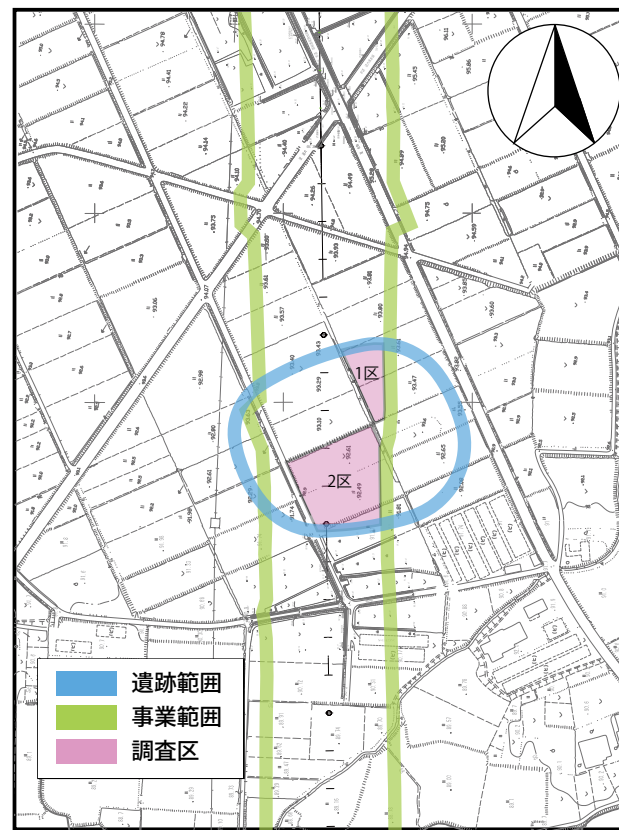


田向 2 遺跡発掘調査説明資料

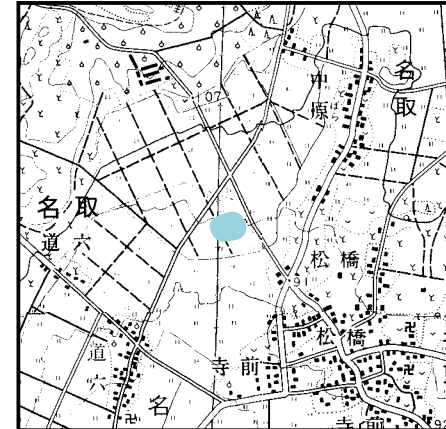
調査要綱	
遺跡名	田向 2 遺跡 (たむかい 2 いせき)
遺跡番号	平成 11 年度登録
所在地	村山市大字名取字田向
調査委託者	国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
調査原因	東北中央自動車道 (東根～尾花沢間)
現地調査	平成 22 年 5 月 17 日～平成 21 年 8 月 27 日
調査面積	2,500 平方メートル
遺跡時代	平安時代
遺跡種別	集落跡
遺構	竪穴状遺構・溝跡・土坑・井戸跡 焼土遺構・ピット
遺物	土師器
調査担当者	調査課長 阿部明彦 課長補佐 伊藤邦弘 専門調査研究員 氏家信行 調査研究員 三浦勝美 (調査主任) 調査研究員 大場正善
調査指導	山形県教育庁教育委員会文化財保護推進課
調査協力	東日本高速道路株式会社東北支社山形工事事務所 村山市教育委員会 山形県教育庁村山教育事務所



田向 2 遺跡 調査計画図 (1:4,000)

2010 年 9 月 26 日 (日)

(財) 山形県埋蔵文化財センター



遺跡位置図 (1:25,000)

1 調査の概要

田向 2 遺跡は、山形盆地と尾花沢盆地の境にある、河島山丘陵の南麓につながる低地部に立地する平安時代、および近現代の遺構・遺物が発見された遺跡です。東北中央自動車道 (東根～尾花沢) 名取地区の発掘調査の一環として、発掘調査を行いました。

今回の調査では、約 2,500m²の範囲を対象としました。調査区は、遺跡の北東側の 1 区と南西側の 2 区を設定しました。1 区は、残念ながら、昭和 17～19 年の名取地区一帯で行われた開墾や、昭和 41～43 年に行われたほ場整備によって、遺構が壊されていることが判りました。2 区では、中央より南側において、南に緩やかに傾斜している旧地形とともに、いくつかの遺構が認められました。

2 見つかった遺構と遺物

見つかった遺構には、**竪穴状遺構**、**焼土遺構**、**溝跡**、**井戸跡**、**土坑**があります。さらに土坑は、遺構の形状から、**地下室状の遺構**や**貯水槽跡**と考えられるもの、用途不明の**方形の土坑**があります。

竪穴状遺構は、約 2m 四方で、遺構の外周に浅い溝がめぐっており、また全体的に浅く窪んでいました。遺構の堆積土からは土師器 (はじき) 片が、そして遺構の中央からは木炭がわずかながら出土しました。また、遺構の南西角の隣には**焼土遺構**があり、焼け土と木炭、土師器片が混じっていました。この竪穴状遺構は、住居跡の可能性もあります。

溝跡は、竪穴状遺構の北側と、竪穴状遺構そばにある溝の東側の延長線上で見つかりました。2 つの溝跡は、本来 1 つの溝であったかもしれません。2 つの溝跡の堆積土からは、9 世紀～10 世紀 (平安時代) に作られたと考えられるロクロで成形された土師器片がたくさん出土しました。



調査区全景 (南より)

井戸跡は、調査区の西端中央と南西部で見つかりました。ともに、深さが 1.4 m～1.5 m あり、地下水が染み出す青灰色の粘土層まで掘り下げられた、素掘りの井戸です。また、2 基とも人為的に埋められていました。埋土の上部から土師器片が出土しましたが、井戸がいつ作られたのかについては不明です。

地下室状の遺構は、調査区の北西部で見つかりました。埋め立てられた浅い皿状の土坑の北側半分を壊して掘り込まれていました。北西側には 2 段の階段状になっており、そこから南側に空間が広がっていました。北、東、南壁面の上部には、天井の一部が残っていました。この遺構は、使われたのちに意図的に埋められたようです。その埋土からは、多量のロクロ土師器が出土しました。しかし、遺構の下層には、遺物が残されていなかったため、遺構がいつのものであるのか、何に使われたのかはわかりません。

貯水槽跡は、調査区の西部、方形土坑の北西角付近で見つかりました。直径約 1.8 m、深さ約 0.6 m で、表面には黄褐色粘土と粗めの砂が混ぜられた土で塗り固められていました。黒色土で埋められていたが、中からはガラス製手回しコマ (大正、あるいは昭和初期?) と、中央に「祝 (旧字体)」とその周りに日の丸 (日章旗)、および旭日旗が描かれた磁器の皿 (日清戦争 [1894 年～1895 年]、あるいは日露戦争 [1904 年～1905 年] の戦勝記念品?)

などが出土しました。遺物の年代観から、貯水槽は、明治後半～昭和初期に作られたと思われます。また、この遺構は、1947 年の航空写真と遺構の上の堆積土を確認する限り、1942 年～1944 年 (昭和 17 年～19 年) の開墾時に破壊されたと考えられます。なぜ、貯水槽が作られたかについては、現在調査中です。

方形の土坑は、貯水槽跡の南東角付近で見つかりました。東西軸、南北軸ともに約 2.6 m で、深さ 50～70 cm です。中央には、厚さ約 5 cm、約 80 cm 四方の砂の含有量が多いコンクリート製のブロックが 2 枚、東西に並んで置かれていました。ブロックの下には何もありませんでした。ブロックの上面やその周辺からは、多数の河原石のほかに、ガラス片 (板ガラス、ガラス容器の一部)、型押し作りの磁器、鉄片、木片などが出土しました。また、この遺構も人為的に埋められていました。上述の貯水槽跡と関連があると思われるが、この土坑が何に使われたのかについては、現在調査中です。

3 まとめ

今回の調査では、残念ながら田向 2 遺跡では、平安時代の人々の活動痕跡が、明確には残されていませんでした。しかし、現在発掘調査が行われている松橋遺跡や清水遺跡、東熊野苗畑遺跡では、平安時代の遺構や土器が見つかっており、これらの地域では、平安時代に多くの場所に人々が生活していたようです。この時代の出羽国では、朝廷と蝦夷との戦争や、鳥海山や十和田湖の噴火 (871 年と 915 年)、飢饉などが起きていました。また朝廷側は北方に対する支配を強めていました。この時代の北村山地域の様子については今後の検討課題と言えます。

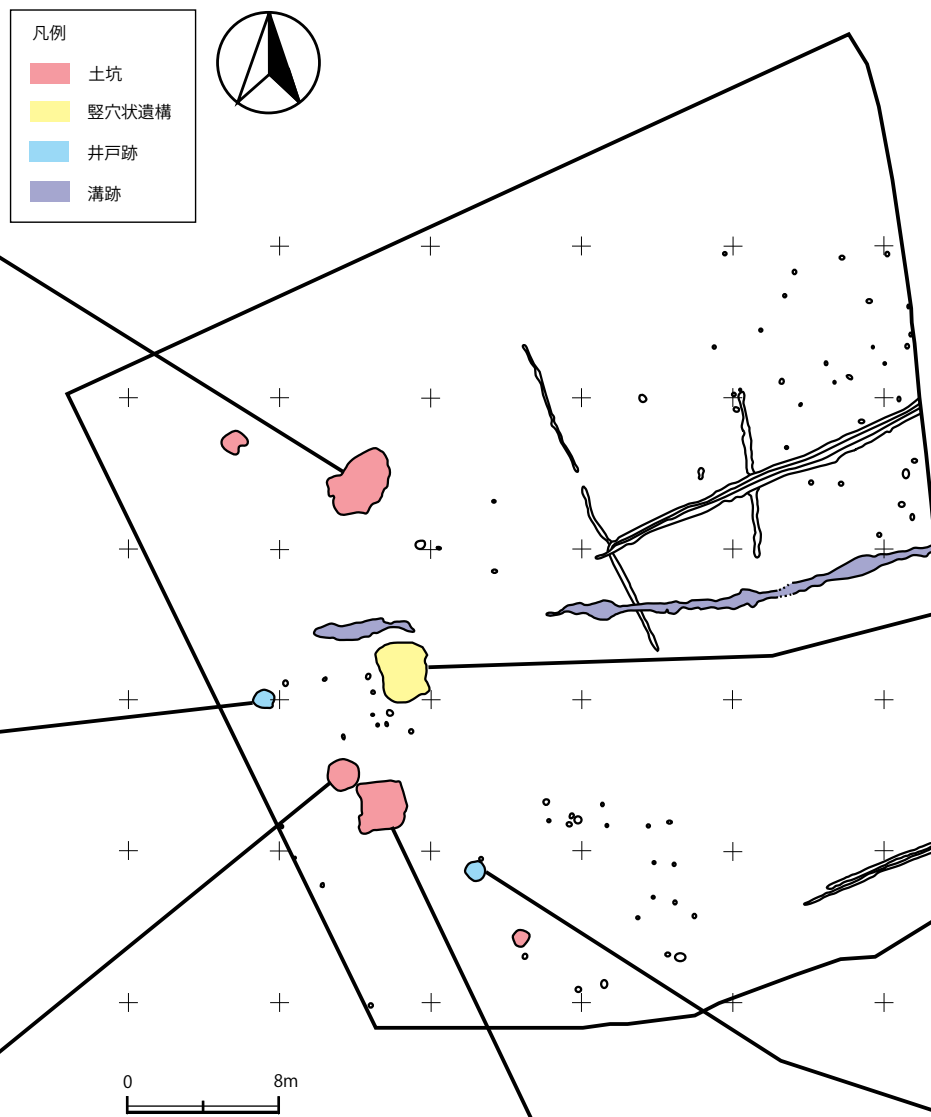
田向 2 遺跡では、1941 年～1944 年の「西郷村土地開発営団」の開墾以前と考えられる遺構が認められました。* 遺構の性格はまだ判りませんが、大正 2 年に県が稲作改良を推進し、西郷村でも大正 9 年より稲作改良に乗り出していました。また同じころ、畑作の推奨や蚕桑の改良も行っていました。今回見つかった遺構は、そのような時期に作られ、使用されたものかもしれません。

* 『西郷の村と学校』によると、当時、農地開発法 (1941 年) の発布にともない、新しい農村像を追い求めた板垣芳男西郷村村長によって、全国でも 2 例目の農地開発営団である「西郷村土地開発営団」が組織され、名取、浮沼、道六を中心に約 200ha の開墾が行われている。1947 年に撮影された米軍による航空写真で確認する限り、現在の道路位置や土地の区割りは、この開墾時に造成されたと考えられる。



土坑（地下室状の遺構）（南東より）

田向2遺跡（たむかい2いせき）
第2調査区 遺構配置図



調査のようす



井戸跡（南より）



竪穴状遺構（北西より）



土坑（貯水槽跡）（南より）



土坑（方形の土坑）（南より）



井戸跡（南東より）